

第15話：帝の身から流浪の旅人ケフェウス

「皇帝は、孤独、一人ぼっち、哀しい時がある。
心の中の皇帝は、駄々を捏ね、言うことを聞かない。
休火山、でも心に、燃えたぎる想いがある。
皇帝の玉座から追われた者の虚しさは、譬えようもない。
(ムネモシュネ)」

タロは途方に暮れました。少年が消え、白頭鷲が来たかと思うと、飛び去り、取り残されて、なにがなんだかわかりません。びっくりするやら、考え込むやら。なぜって、タロはインディオ少年、イシク・クルの道案内でここまで来たのに、これからどうすれば良いか、途方にくれました。困った問題を、タロが考え込んでしまったとき、牛の「モー」というのだやかな声が聞こえました。白い牛、パロです。パロは首を伸ばして、頭で西の方を指し示し、先立って道を歩き始めました。タロ達も覚悟を決め、その後を追います。周りは春の景色が続きます。インディオ少年はいったい、どこへ行ったのでしょうか。

彼と村を出てから、人っ子一人もいません。

歩くうちに、いつしか太陽が西の空に回って、空が赤く染まり始めました。パロは歩みを止めて、近くの草原で牧草を食べ始めました。タロとディオも、道の脇にある土手に座って一休みです。黄色いケシが花盛りです。

そこへ珍しく一人の老人が、二人の眼の前を通りました。かつては立派であったろう衣装と裾長のガウンも、今や色褪せ、履物も穴が開き、石が抜けた王冠を斜めに被り、腰は曲がり、足を引き摺り、狭い歩幅で歩く老人でした。歩くのが難儀なはずで、刀と五角形の盾も運んでいます。でも、タロ、ディオのことなど、全く眼中にありません。忙しなく歩を進めると同時に、一人でぶつぶつ、なにかを言っています。その声を聞いた白い牛のパロは、頭をタロとディオに向け、なにか呟いたような気がしました。

「ケフェウス？」タロには、そんな風に聞こえました。タロは思い出しました。「ケフェウス？ ケフェウス？ ケフェウスとは聞いたことがある名前だな。えーと・・・、あっ、そうだ！アンドロメダの父王の名前だ。」

そうです、つい先日、タロが叔父さんから聞きました。

英雄ペルセウスの話に出てきた王様の名前です。

「ケフェウス、ギリシャ語での「Κηφειός」＝庭師の意味で、かつてのエチオピア王であるが、妻カシオペヤに頭が上がらず、知性、美貌に恵まれた自分の娘であるアンドロメダに嫉妬心を抱き、怪物から人身御供を求められた際、娘を差し出そうとした。娘を救ったのが英雄ペルセウスで、王位はペルセウスに移り、ケフェウスは追放され、流浪の旅に出る。 (ムネモシュネ)」

「でも、なんでここにいるのかな？どこに行くのかな？」
暫く休んだ後で、タロとディオは、また歩き始めました。
平地の先に林があり、道端には春の儂さを示す福寿草が咲き乱れていました。

道の先には、さっきの老人が足を引き摺りながら歩いています。タロとディオは、老人に近づきました。老人は二人に気づくと、「ヒエー」と声を上げて、足を絡ませ、前のめりになりながら進もうとしましたが、振り向いて相手が子供とわかると、落ち着きを取り戻し立ち止まり、咳払いをしました。

「お前たちは誰か？我を誰様と知っておるか？頭が高い。我は現エチオピア王のケフェウスだ。訳あって旅の途中、供の者も退けてである。我を脅すでない。後からやって来る者にろくな奴はおらぬ。死神も後から来て、そっと肩を叩く。だから前に進むのみ。心が先で、体は後から追いかける。お前たちは、体が先で、心は後追いだらう。しょうがない。いけない！こんなところでぐずぐずしてはいられない。とんだ足止めを食った。急がねば。」

タロが話す暇もなく、老人はよろけて先に進みました。

夕焼けが空一面を赤く染めていました。

夕焼けに見とれてふと気がつく、老人の後姿はほんの少し小さくなっていました。

足の前爪が三本、後爪がない千鳥のような千鳥足ながら、タロたちには見えない相手と怒鳴りあい、刀を振り回し、盾を片手に闘っているようです。いつまで続くやら。

なぜ彼の名前がケフェウス＝庭師かってわかりますか？彼には暗い噂があります、彼は、後で話すカシオピヤの父王の館に出入りしていた庭師でした。娘カシオピヤは若き日の彼の美貌に一目ぼれ。

そこで彼女の婿となったのですが、義理の父を暗殺して王位を奪った、という噂です。自分の娘を怪物の生け贄に差し出すくらいですから、真実味のある噂です。

ケフェウスの夜空の居城は、ケフェウス座です。

タロは気になって、ズボンのポケットの小さなノートを開くと、十三頁目に文字が書いてあります。

「易経：上卦＝火：下卦＝山：旅」

「落陽に臨む哀愁の旅路：孤独な旅人」

「割れた氷の間から魚が飛び出る」そんな季節です。

それからどうなったでしょう？お話し、続きはまた明日！